ふらっと旧東海道　　2007.2.7

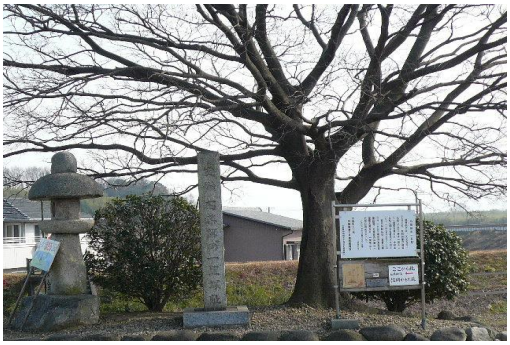
四日市～庄野宿 13km を歩く

桑名～四日市に引き続き庄野まで歩きました。2 月 7 日いつものように友夫婦と一緒に 8.30” 出発し、真冬とは思えぬ温かい旧東海道を歩きいろいろな出会いと発見をしました。

ナビにだまされる

湾岸川越 IC を降りて 23 号線を走り四日市市役所をめざしました。ナビもセットし、以前に比べると 23 号は少し空いている感じで楽に走ることができました。やはり名阪が出来た効果でしょう。
地理には格別強い友がナビゲーターなので、ナビはいらないと思っていました。事前に地図も準備して右折する交差点名も確認済み。
ところが、交差点名が書いてないのでナビの″次の信号を右折してください″に合わせて右折レーンに入りハンドルを切ったらビックリ!! 何とそこは消防署で道路はないのだ。
大トラが走りかう道路の真ん中で立ち往生しては生きた心地はしない。びっくりしたが、大トラの隙間を狙って左側の走行車線に一気に走りこんで脱出した。しかし、これってどうなっているのかな!!　確かに 2 人ともナビの音声ガイドを聞いて右折したのに。
そして市役所前まで来たが、今度は駐車場の入り口がどこなのか分からない。はっきりした案内がないのだ。ぐるりと一回りして隣の市営駐車場へ入った。市役所の耐震工事が行われていて分かりにくかったのだが、そんな時こそ案内をしっかり行って欲しいものだ!! 先日の成田と言い、今日の四日市といい初めて来た人でも迷わないためにどうしたらよいか!!　もっと気配りが出来ないものだろうか!!

加佐登駅付近の工場


石薬師一里塚

庄野をスタートし石薬師へ

9.30”に駐車場に到着、ただちにJR四日市駅に向かう。9.44の亀山行きに乗って加佐登駅まで行く。そこから四日市に向かって歩くことに-------
四日市から南四日市、河原田、川曲(かわの)、次が加佐登になる。料金は230円、加佐登駅は庄野宿の外れにありJRのみが通っている、ここに10.05到着。風もない穏やかな小春日和のなか、田舎道を歩きまずは石薬師の一里塚をめざす。

田園の中を歩いてひと目で気がついたのは、道路以外は土地が低いのだ。そして、水路が四方八方に走っている。したがって家も高台にあり農地は一段と低い所にあるのだ。これでは大雨が降ったらみな池になってしまうだろう。そんな田舎道を国道1号線を眺めながら30分も歩くと石薬師の一里塚に着いた。道路が左に大きくカーブしている川原に、東海道石薬師宿の碑と共にあった。この碑は昔の学校の門柱を再利用して造ったと説明があり榎木が植えられて石灯籠が建っていた。
一里塚から10分も歩くと石薬師寺に着いた。山門をくぐると広場があり、その先に大きくはないがきりっとした本堂が見えた。
参道には四国は讃岐の人が寄付した灯篭が建っていた、伊勢の国なのに讃岐の人のお参りも多かったのか!!　それだけご利益があったということか!!
そこで私も息子のお嫁さんが見つかりますようにとお願いした。

石薬師寺本堂

広重の描いた石薬師宿

ムダの多いおかしな街並

　石薬師の宿場は街道を挟んで、両側に一軒づつ並んでいるのではなく奥にもう一軒あって二軒づつが並んでいた。その名残で今も道路から奥に３軒もの家がある、したがって家と家の間には必ず道路があるのだ。それでないと奥の家には入れない、なんとムダなことか!!
まさにここには街づくりのための、政治がなかったことの証しではなかろうか。

夏は来ぬで知られる「佐々木信綱」

　あまり宿場町らしからぬ街並を行くと、信綱の詩があちこちに掲げられていた。11.00 に佐々木信綱記念館に到着した。
客は居なくてわれわれだけだった、それが幸いしたのか館長さんが丁寧に説明してくれた。おかげでとても分かりやすく、助かったしだい。

佐々木信綱記念館

信綱の生家

佐々木信綱とは

明治 5 年	石薬師村で誕生、5 歳で松阪へ移り 10 歳で上京。 東京大学に 12 歳の最年少で入学
明治 29 年	24 歳で藤島雪子と結婚 唱歌「夏は来ぬ」を発表
明治 44 年	文学博士の称号を授与
大正 6 年	学士院恩賜賞受賞
昭和 12 年	第一回文化勲章受賞
昭和 32 年	心の花 700 号記念号を刊行
昭和 38 年	91 歳にて熱海で永眠

このような経歴を持つ国文学者、歌人であった。これまで知っていることと言えば「卯の花のにおう垣根に　ホトトギス早も来なきて　しのびねもらす　夏は来ぬ」の詩くらい。

ところが彼の弟子とか仲間の中に、東浦出身の著名人「久松潜一」の名があり写真では信綱の隣にいた。あとで分かったことだが、久松潜一は信綱の長女と結婚していたのだ。町の花が「卯の花」で久松潜一が郷土の有名人であることを話すと、館長さんも驚いていた。こちらが驚いたのは、信綱は何と 9 人の子持ちだったということだった。世が世なら表彰ものだ。隣には生家が移築されてこちらも記念館として公開されている。帰ってからいただいた「うのはな」の新聞を見たら、館長さんは 18 年 4 月 1 日に就任した伊藤さんだった。伊藤さんは元石薬師小学校の校長先生で、作歌意欲旺盛で 1 日 3 首を自分に課しているとあった。

記念館を出てすぐの所に「小澤本陣跡」の立て札があった、でも家は現代風の新しい家が建っていた。ここ石薬師宿は元和2年(1616)に設置され、村の名前も近郊に知れ渡っていた石薬師寺から、寺名をとって村名にしたという。

とんでもない食堂

　石薬師の街を11.50”に出て、今日のコースでは食堂もあまりないだろうからぼちぼち探そうと言いながら進んだ。
ちょうど国道1号線と交差する所で、ラーメン屋と和洋食堂の看板があった。友の細君がすかさず「和洋食」と言ったのでそちらへ向かった。が、前まで行くとお休みだった。でも隣に喫茶店がありランチの看板があったのでそこへ入った。でもこれがいけなかった、とんでもないお店だったのだ。先客が2人いて一人はすでに食べていた、もう一人は料理を待っていた。そこでわれわれはランチを注文した、ここまでは何ともなかった。でもその後から来た客は大変!!　席についてもお絞りはおろかお茶一つ出ない。なにしろおばちゃん一人でやりくりしているので、厨房に入ったらそれっきり出てこないのだ。一人でやってきた客はたまらず出て行った、次の3人組の若者はいたたまれずに呼びに行った。そして注文をしたがこれがいけない、みんな一人一人違うものをオーダーした。ユニフォームを着ており、会社の昼休み中に食べないと困るのではとこちらが心配になる。次の客は常連なのか落ち着いて新聞を見ている、さらに次の客は先客の食べた食器が残っている席に座った。客の食べた後かたずけすらできない状態だった。これはいつまで経っても注文を聞いてもらえないだろう。案の定でその人も呼びに行っていた。
われわれのランチはなんとか出てきた、食べ終わるとコーヒーはあきらめてただちに退散した。コーヒーなしでもサービスはなかった。店を出るとすぐ近くにも喫茶店があるではないか。

芭蕉が落馬した杖衝坂(つえつきざか)

　国道1号線を横切って旧東海道を行くと、あちこちの梅の花がきれいに咲

いていた。そして国道が下りの坂道になった向こうには、四日市の街が見えてきた。

杖衝坂

東海道の案内看板

旧東海道は下らずそのまましばらく進むと、急坂が現われた。そこは杖衝坂という、旧東海道の中でも知られた急坂だった。コンクリートの舗装には滑り止めの筋が入れてあったが、雪が降ったり凍結したらとても車では無理だろうと思われる。そのために松尾芭蕉が馬から落ちたという所で、「歩行(かち)ならば 杖つき坂を落馬かな」と詠んでその名が世に知られるようになった。でもこの句には季語がないので俳句とは言いがたいのだが、芭蕉が詠んだので誰もケチをつけられなかった。

　今の世にもままあることではあるが、それにもう一つここには伝説がある。ヤマトタケルが遠征で疲れて、この地で足を三重におって休んだことから三重県の名が生まれたというのだ。ちょっと馬鹿馬鹿しいが最初に言ったのはだれだろう??そこからすこし行った所に、平成の一里塚と名付けた休憩コーナーがあったので小休止にした。時間は13.45”ですでに1時間歩いていた。ちょうど小学生たちが下校してくる時で、わいわいがやがやとにぎやかだった。

日永の追分でおいしい水を飲む

次は日永の追分をめざして歩く。ここまで街道を歩いてきて一番の発見は、素晴らしい日本建築の豪邸があちこちに建っていることだ。
最近はやりの家ではなく、二階建てのどっしりした日本建築はとても美しいと思った。見た感じでは農家らしいのだが、土地を売って豪邸を建てたのだろうか??　でなければそんなお金はないと思うのだが、それともある所にはあるということか。
14.30”やっと日永の追分に到着した、数人の人がここの水をポリタンクやビンに何本も入れていた。
われわれもペットボトルのお茶を捨てて飲んでみた、でも味は良く分からなかった。ついでにペットボトルに水をくんで持ち帰った。ここで小休止の後日永の一里塚をめざして最後のスパートだ。

日永の追分と説明

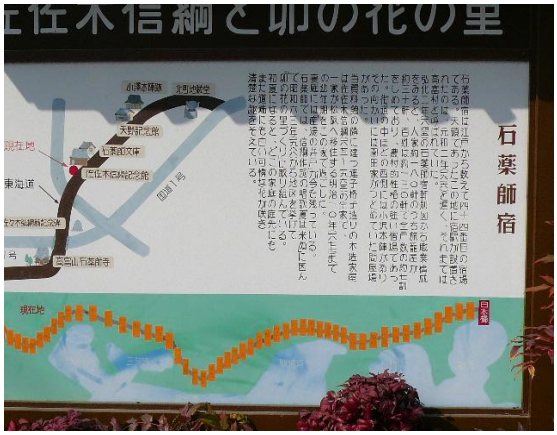
日永の一里塚を見落とす

追分を出てしばらく行った所に松の木が１本だけ残っていた、かなり大きな木で名残の松として保護されていた。そこの説明を見ると当時の街道は松並木も含めて幅５間(9m)で、現在の道幅と一致する。ちなみに旧東海道の道幅は３間(5.5m)だった。
一里塚はまだかと歩いたがなかなか現われなかった、それもその筈で通り過ぎていたのだ。東海道の案内看板で気がついたがすでにおそかった。帰って

から確認したら、家と家の間の隙間にほそい石柱が建っているだけなので分かりにくいとあった。われわれも 4 人とも誰も気がつかなかったのだから致し方ない。この辺りかなり疲れてきたので、あと 2km 程残す大宮神明社で最後の休憩にした。腰を下ろすとやれやれと言う気分だ。

　そのあと元気をだして四日市市役所をめざす。途中立派な格子窓の家があった。旧鈴木製薬所で嘉永 5 年(1852)に建てられた。

膏薬の名前が書かれた古い看板を掲げる、鈴木薬局は 200 年以上も製薬業を営む旧家である。さらに進むと街の中心近くに「丹羽文雄生誕の地」という碑が建っていた。場所は保育園の前で、若いお母さんや子供たちでごったかえしていた。いろいろな街並を見てやっと 16.00”に市役所隣の駐車場に着いた。



石薬師宿の案内

200 年の歴史をもつ鈴木薬局

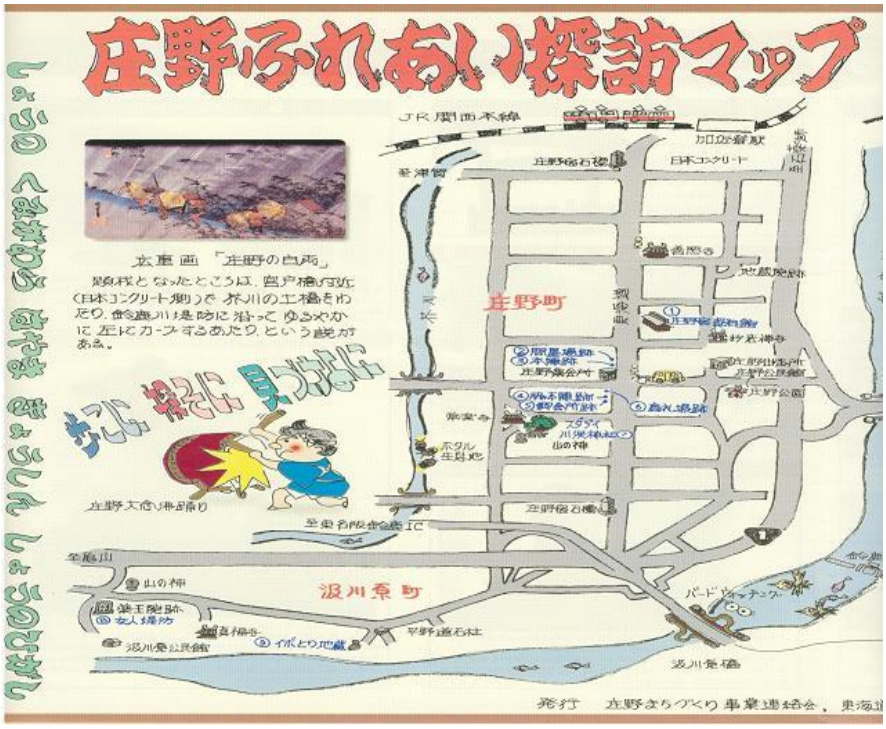
2006.9.20

鈴鹿市「庄野宿」を散策

９月２０日午後 0.30”に鈴鹿市の「庄野宿」へ向けて、バスで郷土資料館を出発した。参加者３７名と事務局３名に講師１名の合計４１名でバスはほぼ満席である。

家康が数にこだわりできた庄野宿

東海道５３次の４５番目の宿として発展し、安藤広重が描く「庄野の白雨」でも知られている。江戸から１０２里２３丁余。隣の石薬師宿へ２７丁、亀山宿へは 2 里で東海道のなかでは一番最後に出来た。それも家康が仏教の華厳宗(古い宗教でよく知られていない)で 53 という数字にこだわり造ったと言われているのだ。



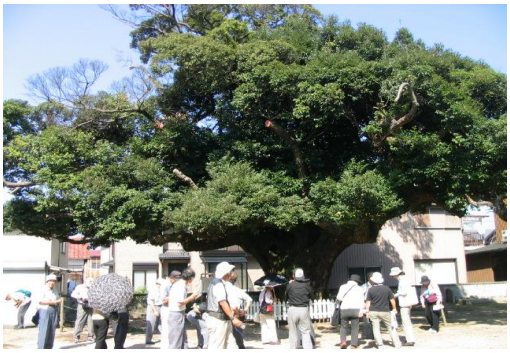
徳川家康は慶長 6 年(1601)に東海道 53 次の宿場を定めている、そしてこの庄野宿は 23 年後に 36 戸しかなかった村に、隣村から引越しをさせて 70 戸でスタートした小さな宿場だ。これにより東海道 53 次は完成したが、そんな庄野宿は泊まりより休憩が主の宿場だったといわれる。

静かな通りに古い家

バスを降りて旧東海道に入ると、そこは真っ直ぐに伸びた街道の両脇に格子戸のある古い家が点々と並び、わずかに宿場の面影を残している。そして宿場の入り口には、旧庄野小学校の門柱に使用されていた石柱に「東海道庄野宿」と記されている。車の通行も少なくとても落ち着いた雰囲気がある、これが庄野宿の第一印象である。

初めに見学したのは川俣神社の「スダジイ」、ぶな科の常緑樹で樹齢は数百年を超え、幹周り 6.3m の巨木。1969 年に県の天然記念物の指定を受ける。初夏に雌雄の花をつけ小粒のどんぐりの実がつく、普通のどんぐりは食べられないがこの実は食べられる。私も子供の頃に地元の伊久路神社の境内で椎の実を拾って食べた記憶がある。

宿場の入り口



スダジイの木

本陣跡、脇本陣跡も説明板があるのみ

高札場跡を過ぎると宿場の中心地だが、脇本陣も本陣も面影はなく説明板のみでちょっと寂しい。いたし方のないことではあるが---
そして友がこの時気がついたのは、宿場内の敷地の境界がとても広いのだ。どの境を見ても 20cm 位の空きがある、昔流なら 7 寸の空きといったところだ。それに間口も広い、明治になって二軒分を一軒にまとめたのだろうか?昔は間口の広さで税金が決められていたので、境界がこんなに広いことはあり得ないのだ。

資料館で分かる庄野宿

庄野宿で昔の面影を見ることが出来るのが、油問屋の旧小林家の母屋を復元して造られた庄野宿資料館である。

小林家住宅だった資料館

広重の「庄野の白雨」

この建物は嘉永 7 年(1854)10 月に建てられたという、棟札が残されており建物自体が貴重な遺産である。
本陣、脇本陣、問屋場、高札場などと農具、民具なども展示されている。なかでもここの目玉は高札である。
庄野では本陣と脇本陣の間に高札場があったが、天和二年(1682)当時の高札が 5 枚保管されており、大きなものは長さ 8 尺 5 寸(2560mm×700mm)もあり、そして驚くことに 300 年余を経た今でも文字が読み取れるのだ。
これは墨を作るのにニカワをつかっていることで、木が風化しても文字の部分は浮き上がって残っているのだ。何とすばらしい日本の文化だ!!

庄野の名物「焼き米俵」

珍しいものがもう一つあり「焼き米俵」という。これはモミの付いたままの米を、10 日ほど水につけた後ホーロクで炒って、軽く搗いた物だ。日持ちが良いことから旅の非常食として珍重された庄野の名物であった。
この話を聴いた面々が感心していると、同行している森岡の大先輩曰く、「子供の頃は残ったモミを炒って食べた」という。もったいないの精神がそうした知恵を生んだに違いない。
そして、もう一点はここまで資料館の説明をしてくれたご婦人は東浦の森岡出身と聞いてびっくり。因縁というか人のつながりの不思議さを思った。
宿場を出た所に日本コンクリートの工場が見える、その交差点付近からバスに乗り 15.00”帰路についた。長島 PA で小休止して資料館に 15.45”到着した。